

百賀の祝い

札幌市医師会
定山溪病院

小野眞知子

年明けに夫の父の百賀のお祝いがあった。義父は北大医学部19期の今や唯一人の生存者である。寝たきりや進んだ認知症であればこうした席を設けられるはずもなく、驚くことに明晰な頭脳を保ったままでいてくれる。高齢になって脳細胞の減少に伴って記憶力は落ちて、神経細胞ネットワークは増加し続け、経験や判断力は増していくといわれ、結晶性知能と呼ばれる。

義父は戦争中に海軍の医師として南方に行き、乗っていた船が2度も沈没し大変な思いをしている。戦後は薄野で開業し、当時はチカルなどにもよく招待されていたらしい。山鼻でも夜間診療所を開き、4人の息子を立派に育て、70歳代に妻に先立たれて以降は長く一人暮らしをしている。現在は家政婦さんと、介護保険を使って生活が支えられている。夫をはじめ息子たち、静明館診療所の矢崎先生、訪問看護師、熱心なケアマネージャ、介護の方々、福祉器具レンタル、配食業者、しっかり者の家政婦さんのチームワークが上手く機能している。

私は定山溪病院に勤務して4年になり、神経難病の終末期、脊損や認知症の寝たきりの方を診察している。患者さんは皆さん、帰れるものなら住み慣れた家で暮らしたいのである。病弱や高齢になっても家で過ごせる人は幸運と努力の賜物。

義父から読み取れる長寿の秘訣の第一は、医師という職業であることだ。教育レベルが高く、知的刺激のある生活を続け、病気・衛生・栄養の知識があり、実行する経済力がある。若いころにアイスホッケーをしていて足腰が強い、気が強いことも大切。

お祝いの事務局には夫が当たり、私もサポートした。外食は難しく、丸元の仕出しを手配。飲み物はシャンパンと日本酒松竹梅の大吟醸。内祝いの品は輪島塗の菓子器。幸い間に合って、裏の名入れが金蒔絵にて入るに至り感激。添える小菓子はショコラティエマサールのオレンジピールチョコ。宴は和やかに進み、食事伊勢海老や鯛といっためでたい食品が揃っていることを喜んでもらい、ずいぶん食が進んでいた。最後に100の字の形のローソクを立てたケーキを食べた後、「長生きできてよかった」と言ってもらった。百年間の風雪を生き抜いたことにただただ敬意を感じ、私たちを見守ってくれていたことに深く感謝。日野原先生も同様であったが、元気で長寿ということはそれだけで皆に元気をくれる。おとうさんありがとう。

